

## 研究・調査報告書

報告書番号	担当
92	滋賀医科大学福祉保健医学講座
<b>題名 (原題/訳)</b> A 21-year longitudinal analysis of the effects of prenatal alcohol exposure on young adult drinking. 出生前の母親のアルコール曝露が子供の成人時のアルコール関連問題に及ぼす影響についての21年間の縦断研究	
<b>執筆者</b> Baer JS, Sampson PD, Barr HM, Connor PD, Streissguth AP.	
<b>掲載誌 (番号又は発行年月日)</b> Arch Gen Psychiatry. 2003 Apr;60(4):377-85.	
<b>キーワード</b> 出生前アルコール曝露 ・ 若年成人 ・ アルコール関連問題	
<b>要旨</b>  背景;出生前のアルコール曝露が出生後のアルコール関連問題発生のリスクのひとつではないかと考えられている。  方法;妊娠中期の女性を対象に飲酒とアルコール関連問題の状況について問診し、そのとき妊娠していた子が21歳になるまで経過を追った。1974年11月4日から1975年12月2日の間に喫煙・カフェインや他の薬物の使用・個人情報と妊娠中の飲酒状況について調査した。子供が14歳と21歳になったとき、両親を対象に子供のアルコール関連問題について調査した。出生前から21歳になるまでの間に計7回アルコールや他の薬剤の使用状況と家族環境について調査した。成人した子供(年齢21歳、総数433人)について、飲酒量と飲酒回数を自己申告によって調べ、アルコール関連問題とアルコール依存度を測るためのアルコール依存度調査を行った。  結果;出生前の母親のアルコール曝露は、子供の21歳時のアルコール関連問題と有意に関連があった。この関連は、アルコール問題の家族歴やニコチン曝露、他の薬剤の出生前曝露、両親の薬剤使用を含む出生後の環境因子と独立であった。両親のニコチン曝露は21歳時の子供のアルコール関連問題とは関係なかった。 まとめ;出生前の母親のアルコール曝露は子供のアルコール関連問題発生の危険因子である。アルコール関連問題発生における胎児曝露の潜在的メカニズムを明らかにすることが必要である	